

# [10] 舞踊世界のエスペラント ～バレエ、その普遍性～

1991年2月15日 東京新聞 夕刊

## ● 太陽王の技量

大方の舞踊は、その発生の段階においては民族的なもので、クラシック・バレエもその例にもれない。バレエというのはイタリア語の「バレット（小舞踏会）」を語源とするフランス語だが、名前の示している通り初めはイタリアの踊りとして生まれ、それが十七世紀フランスの宮廷舞踊として成長した。太陽王ルイ十四世はバレエが大好きで、自ら主役を踊るほどだったと言うが、しかし残された肖像から推察するかぎり、彼の踊りが現在のバレエの技術水準に近いものであったとは、どうてい考えられない。まあ、国王陛下おんみずから踊られるものを、いかに何でも「お下手」とは廷臣の誰一人として口にする勇気のあったろうはずはなく、ただひたすら耐え忍ぶのみ、であったかもしれないのである。ちなみに「太陽王」という異名は、彼がバレエで太陽の役を踊ったことに由来する。

（筆者注：その後の勉強で、この段の誤りを発見。  
小著『バレエの歴史』（学研）を参照）

## ● 農奴バレエ

バレエがほぼ現在のかたちに近いところまで大成したのは、これが帝政ロシアへもたらされた後のことである。フランス文化に憧れ、日常会話までフランス語で話していたロシア貴族は、バレエに熱中した。はては領民からなるバレエ団を持つ貴族も現れ、友人が訪れるとその接待に上演したり（何たる贅沢！）バレエ団まるごと、まるで土地か宝物のように売却したり（何たる不遜！）した。これを農奴バレエという。踊り手にしても、惨めな境涯から抜け出すにはこれしかないとなれば、どれほど真剣に技

# [10] 舞踊世界のエスプラント ～バレエ、その普遍性～

1991年2月15日 東京新聞 夕刊

を磨いたか、想像に難くない。ロシア的な粘着気質もあつただろうが、それに加えて周辺のアイスラム文化特有の回転、また韃靼民族の跳躍などという技術も導入して、ようやくバレエは真のバレエになったと思われる。

そのロシア・バレエがフランスに里帰り公演をしたのが一九〇五年。時まさにベル・エポックの真つ盛り、世界の文化の中心であつたパリで、これは一大センセーションだつた。そしてそのパリを新たな起点として、バレエは二十世紀の全世界へ広がつたのだつた。

今やバレエは名実ともに国際的な性格を持つものである。日本のバレエ団がモスクワのボリシヨイ劇場で公演したという話を聞くと、今からほぼ三十年前、ボリシヨイ・バレエの初来日で心底感嘆しかつ絶望した私などにとっては、ほとんど信じられない気がするのだが、しかしそれが事実なのだ。

毎年開かれるローザンヌ・コンクールを見ると、バレエがいかにも多民族によつて踊られ、しかもそれぞれに一律の基準で評価され得るものになつたか、よく分かる。ローザンヌは十四歳から十七歳までを対象とした国際新人コンクールで、テレビでも放映されているし、昨年度は日本で開催されたから、さほどバレエに熱心ではない人も、耳にしたことぐらひはあるかもしれない。

## ● 客観性の獲得

バレエがこのように国際的なものになりえたのは、その規範が精緻に体系化されていて合理的に習得できるといふことと、背景にある精神性が普遍的であることによる。このことは裏を返せば、優劣に関し

## [10] 舞踊世界のエスペラント ～バレエ、その普遍性～

1991年2月15日 東京新聞 夕刊

ておおよそ狂いの無い客観的な評価が可能だということの意味している。そうではないか、たとえばどのような名手が出場しようが、タイ舞踊と日本舞踊とハンガリー舞踊とジャズ・ダンスであつたら、どちらが上などと言えたものではない。

つまり、言ってみればバレエは舞踊の世界のエスペラント語なのである。ヨーロッパ中心であるといふものの、各国の特性を取り入れ、きわめて広範囲での共感を可能にした。しかも言語にくらべて舞踊の方は、見てすぐに身体的に共感し感応しうるだけに、効率が良いと言えるかもしれない。しかし、コミュニケーション手段として有効なほどの舞踊、言いかえれば、自分を表現し他人を感動させるほどのものを踊れるようになるには、一つの外国語をそこそこマスターすることなどは比較にならない習練を必要とするから、低次元の会話も可能な言語と並べて、どちらがどちらと言うことはできない。

バレエに話をもどせば、客観的な国際コンクールを可能にしているのは、ひとえに高度な技術というものがあるせいである。精神的なものを身体によって芸術的に表現し、それによって本源的な生命の感動を歌い上げるのが舞踊であるとすれば、現代のバレエはある意味で舞踊の域を越えているとすら言えるのだ。つまり、ひたすら激しく回ったり高く跳んだりすることが要求されるわけで、一般の観客のほうでもまた、それがバレエだと思っっているふしがある。

### ● 至福のアラベスク

私はといえば、体操のウルトラCのような難技よりは、たった一つの心に適うアラベスクの方が、どれほど素晴らしくまた得難いものであるか、言いつ

## 〔10〕 舞踊世界のエスぺラント ～バレエ、その普遍性～

1991年2月15日 東京新聞 夕刊

くせないと思っっている。アラベスクというのは、片足で立って、残る一方の足を後ろに、上体を前に伸ばすポーズで、児童のバレエにでも用いられるほど易しいものだが、しかしクラシックであるとモダンであるとを問わず、アラベスクを抜いたらバレエではないというほど、不可欠なものだ。ひとつの踊りを真に芸術の名に値するものにするのはこういう単純な動きで、たとえばすぐにも心に浮かぶのは、精霊になったジゼルのお玄にして可憐なアラベスク。黒鳥オディールの王子を振り返りざまの挑発的なまめかしいアラベスク。ロミオとジュリエットのデュエットでの愛と祈りにみちたアラベスク。

こうしたものは作品全編の重みを支え、劇場空間に時が止まったかのような至福の瞬間を生み出すものだが、しかし名手の踊りをみても、これこそというアラベスクに出会うことは本当に少ない。日本の観客も、難技にやたら拍手を送るだけでなく、一瞬のアラベスクをこの世ならぬものにするために、舞踊の真髄に心を合わせるようになればいいのだが。